

<特別支援教育 No. 2>

-障害のある児童が通常学級で学習することが、 他の児童に与える影響について-

今回は、障害のある児童が通常学校へ就学した際に、周囲の児童へ与える影響について考えてみたいと思います。

先日、小さな子どもが、障害児と出会い「怖い」と言っているのを目撃し、大変衝撃を受けました。それと同時になぜその子が「怖い」と思ったのかと疑問に思いました。

私はその出来事がその日以来頭から離れず、考え続けていました。なぜ私はその子どもの発言を疑問に思ったのかと考えてみると、私は幼少期から障害のある友達が教室にいたことが当たり前で、放課後も障害のある友達とよく遊んでいたことを思い出しました。その様に、物心がついた頃から障害のある友達がいることが当たり前の環境で育ったことにより、障害のある人が「怖い」という概念そのものを持つことがなかったのです。そのため、その子どもの発言に衝撃を受け、疑問を持ったのだと気付きました。

おそらくこの通信を読まれている方々は私と同じ感覚を持った人が少なくはないと思います。しかし、日常的に障害のある人と全く出会うことのない環境で育った子どもなら、初めての体験（障害のある人と出会うこと）が「怖い」と思うことがあるのではないだろうかと思いました。大人であっても今まで過ごしてきた人生で障害のある人との関わりが希薄な方は同じ様な感覚を持たれているかもしれません。

もし、通常学校で障害のある児童が学習することが当たり前になっていけば、その様な概念を持つ人は少なくなると考えられます。また、障害のある友人との関わりを通し、障害のない友人や周囲に対しても思いやりを持って接することができる様になる可能性も期待できるのではないかと思います。

実際に、文部科学省は「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」において、「共に学ぶことを進めることにより、生命尊重、思いやりや協力の態度などを育む道徳教育の充実が図られると共に、同じ社会に生きる人間として、互いに正しく理解し、共に助け合い、支えあって生きていくことの大切さを学ぶなど、個人の価値を尊重する態度や自他の敬愛と協力を重んずる態度を養うことが期待できる。」と報告しています。加えて、同報告で「学校教育は、障害のある幼児児童生徒

の自立と社会参加を目指した取組を含め、『共生社会』の形成に向けて、重要な役割を果たすことが求められている。その意味で、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進についての基本的考え方が、学校教育関係者をはじめとして国民全体に共有されることを目指すべきである。」とも報告されています。

さらに、大嶋、横山(2014)の「医療的ケアを必要とする児と共に学ぶ児童における支援的行動への影響」において「医療的ケアを必要とする児童と常に一緒に学ぶ学校の健常児は、医療的ケアを必要とする児童と継続的な交流を行う学校の児童や医療的ケアを必要とする児童がいない学校の健常児に比べ、対人的援助をしようとする思いやりの心やルールを守ろうとするような協調性が育まれており、それらを自発的に行動に移すことを体験的に学んでいる可能性があることが示された。」と述べています。医療的ケアが必要という、より重度な障害を持った児童と共に育つこと、障害の程度に関係なく共に支えあい、生きるという考えが育成できる可能性もあります。

今回の出来事を通して、我々が目指す共生社会を達成するうえで、教育の場を変えていくことの重要性をより感じました。今後全ての子ども達が、共に学び、育つことによって、共生が当たり前となる様な制度や、社会的な風潮を作っていけるよう私達も尽力したいと思います。

引用文献

- ① 文部科学省 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321668.htm

<アクセス日 2014年7月9日>

- ② 大嶋絹子、横山美江(2014) 医療的ケアを必要とする児と共に学ぶ児童における支援的行動への影響 小児保健研究 73, 59-64

ぶんせき さどたにえりか
文責 佐土谷絵里佳